

概要報告

実施期日	8月2日(火)
部会名	中学校 総則部会

テーマ 『「小中一貫教育」の推進について』

提案概要

○実践に向けての課題

子どもと子どもを取り巻く現状として、生活環境の変化、価値観の多様化、中学校入学時及び入学後の様々な期待と不安、不登校児童生徒の増加傾向があげられる。行事における交流や部活動・授業の体験、教職員間の授業参観・研究協議など様々な取組を行っているものの、子どもと子どもを取り巻く環境の課題をなかなか解決できない現状がある。この状況から、子どもや地域の実態に合わせた小中連携の在り方をさらに考えていく必要があり、取組をより一層深めていく必要があると考えた。そして、子どもの育ちと学びは、小中9年間で連続して考えていく視点が大切であり、教える側のつながりをより深めていく必要があると考えている。

小・中学校間の連携の重要性を認識し、市では平成23年2月に「小・中一貫教育」基本方針を策定した。その基本方針に基づき、現在の小中連携の取組を一層推進し、小・中学校が滑らかな接続ができるように「小中一貫教育」に取り組んでいる。

○実践の概要

市における小中一貫教育が目指すものは、現在行われている中学校ブロックごとの取組の延長線上にあり、その取組をさらに充実させようとする連携型小中一貫教育である。市では義務教育9年間における子どもの「育ちと学びの連続性」を保障することを目標とし、達成するために『目指す子ども像（共通の目標）の設定』『「市教育課程編成の指針」による9年間を見通した教育課程の編成・実施』『小・中学校での協働実践の充実』を基本的な三つの柱として取り組んでいる。

各中学校ブロックにおける具体的な取組内容

(1) 組織作りに関する取組事例

- ①小中連携推進委員会の設置・・・校長、教頭、小中連携担当者などで構成されている。子ども像の作成や取組の検討、見直しを行っている。
- ②目指す子ども像の作成・・・各校の教育目標から離れないようにしている。各校の教育目標を少しずつ取り入れ、覚えやすいものにするなど工夫している。
- ③3分会（児童・生徒指導、学習、行事）の設置・・・情報交換の際、より具体的な情報共有を目的として取り組んでいるブロックがある。該当のブロックでは、全職員が3つの部会に分かれて所属している。

(2) 教職員間の交流・相互理解を深める取組事例

- ①授業参観兼情報交換会・・・年2回全職員が参加する体制で、授業参観や情報交換を行っているブロックがある。全職員が参加することでお互いの取組をより理解することができ、その取組を児童生徒や保護者に伝えることができた。
- ②交流朝会・・・小中が隣接している立地を生かし交流朝会を行っているブロックがある。中学校の校長講話を小学生が、小学校の校長講話を中学生が聴くことで、学校生活の一端に触れると共に、ものの見方や考え方の多様性を学ぶことができる。また、合唱コンクールにおける最優秀クラスの合唱を小学生が鑑賞することで、合唱の取組に対する理解を深めると同時に、中学校生活への期待を高めることにつながっている。

(3) 児童生徒間の交流を深める取組

- ①収穫祭・・・総合的な学習の時間を利用して中学生が栽培した野菜を小学生とともに収穫し、調理したものを一緒に食べることで交流を深めることをねらいとして取り組んでいるブロックの事例。取り組んだ中学生は、小学生に楽しい経験を提供することができ、達成感や充実感を得て自信が付き成長した姿をみせている。
- ②小学校の陸上記録大会練習へ生徒の参加、指導（陸上競技部）・・・指導後の中学生の成長がみられ、また小学生にとっては、中学校生活のさまざまな疑問や不安を中学生に聞くことができるなど、双方にとって有意義な取組となっている。

(4) 家庭地域との交流を深める取組

- ①小中合同避難訓練・・・地震などの災害は、同時に起こる。合同訓練は保護者が兄弟及び姉妹を同時に引き取る現実的で実践的な取組である。

○成果と課題

【成果】

- ・目指す子ども像（共通の目標）を設定することができ、具体的に研究を進めることができた。
- ・小中教職員の交流が深まった。
- ・校種間を超えた児童生徒の理解が深まった。
- ・期待感をもって中学校に入学する生徒が増えた。
- ・中学生が小学生と接することで、さまざまな成長がみられた。

【課題】

- ・教職員の共通認識や意識をさらに高めることの必要性。
- ・複数校において取り組むため、日程調整が困難な状況である。また、教職員が負担を感じないようにするために早め早めに日程調整をするなど工夫も必要である。

○今後の取組

- ・継続して取り組むことのできる組織作りと無理のない取組を行う。
- ・教職員同士が今まで以上にお互いの学校の取組を知る。
- ・連携に係る取組は前年度中に調整を行う。
- ・小中連携に係る取組を家庭や地域に積極的に周知していく。

質疑概要

特になし

研究協議概要

8グループに分かれ、「各校の取組と工夫、さらに深めるために」について協議し、その内容を発表した。

- ・研究授業や授業公開日にお互いの学校へ行き、意識を高めている。
- ・授業見学などについては予定をあわせるのが難しいので、行事予定にあらかじめ組み込むようにしている。
- ・何ができていて、何ができないのか生活指導面だけでなく学習指導面でも連携をとることが大切である。
- ・日程調節が難しいという問題点を解決するために、市教育委員会で交流を行う日を調整している。
- ・小中9年間を通して、どのような子どもを育てていきたいのか話し合い、願いをもつことが大切である。
- ・小学校の校内研の内容につなげて、中学校も校内研を行っている。
- ・小中交流を深めるために、お互いの評価方法やカリキュラム内容、学校生活のルールについても知っておくとよい。
- ・小中連携のための時間を生み出すことが大変である。細々とでも続けることが大切である。
- ・向日葵を植えたり、あいさつ運動を一緒に行ったり、隣接している小中で交流を行っている。

まとめ概要

- ・負担感の少ない、多忙感があまり出ないことを意識した連携型の小中一貫教育の取組発表だった。今までの取組を生かし、より充実したものになるように取り組んでいた。ブロックごとに目指す子ども像をもち、方法論だけで満足せずに、理想を常に追い続け、良い取組をいくつも行っている。日程調節など難しい点もあるが、積極的に取り組むことで成果をあげている。今後は、9年間を見通した教科の教育課程編成について、取組を期待したい。横との比較ではなく、縦の比較である学校の成長へつながっていく取組をしていくことが大切である。
- ・小中一貫教育を行うにあたって大きな目的としてあげられるのは「中1ギャップの解消」「9年間を見通した教育課程編成」である。連携を進めるうえで、9年間を「子ども理解の一貫性」「教育目標の一貫性と学習目標の設定」「学習指導の継続性」「学習内容の系統性」の4つの視点で見通していくことが大切といえる。今回の取組は4つの視点から考え、しっかりした計画が立てられている。また、実態に合わせて無理のない取組をしていくこと、継続して取り組むことのできる組織作りをしていくことが重要である。現在行っている取組を見直し改善をしていくなかで、子どもたちにとって何が有意義なのかを考え、取り組むことが大切である。